

物故作家



大雪連峰初夏 田辺三重松画

追悼

—田辺三重松さんのこと—

岩船修三

健康そのもので、真面目な田辺さんが「今朝急に亡くなられました。」と道新本社から報せを受けた時は、本当に出来ぬ程に驚いた。誠に惜しい人を失ったものである。田辺さんを初めて知ったのは、私が16歳頃で、亡き伊藤信夫君と一緒に訪れたのが初めて。11歳年上の田辺さんでは大人と子供の出会いであった。

田辺さんのお宅は函館の大黒町の角で、一本表通りに私の家があり、共に同業呉服屋の息子に生まれ、田辺さんのお母さんと私の祖母と仲良く、時々家に遊びにこられて、「三重松は絵ばかり描いて、どうなるものやら。」と口説いていたのを知っている。私もワットマン紙に描いた水彩画を持って行き、見ていただいた。その頃の田辺さんは、前掛姿で火鉢の前に座り、客の対応をしていたが、あの風貌ではどう見ても商人らしくなかった。田辺さんは、油絵を描き出したのは30歳過ぎてからで、当時は水彩画を描いていた。商売のため時間がなく、主に静物で、風景は近くの坂道や火見櫓が見える風景で、「絵を描く時間がほしい。」と嘆いておられた。

商人になったり、学校の教員をしたりといろいろと苦労をされたが、一度も絵をやめずに、60年の間、函館を離れず描き抜き、二科会員となり、行動美術を創立し、全道展を創り、東京に出てからはますます活躍されて、人間的にも皆から畏敬され、作品も魅力を増して、画壇の親爺的存在であった。

先般の北海道開発功労賞の式場で、奥様に「先生のような真面目な方がどうして目を悪くされたりするのでしょうか、私などは両目がつぶれなければならないのに。」という、「あまり主人が真面目過ぎるから罰が当たったの

でしょう。」と冗談をいわれたが、本当に田辺さんは真面目人間で、酒は一滴もゆけず、莫も戦争中に覚え、夜遊びもせず絵を描くこと以外は楽しみはないような人であったので、目を病んだことは、大変なショックであったと思う。二度も手術をされたことも肉体の負担となり、体力もあの若い者も負ける健脚振りが大分弱られたようであった。

「鉄砲を撃つ時は両目があっても片目で撃つだろう。これから片目でウント良い作品を描くよ。」と教え子にいわれておったそうである。田辺さんは、見るからに男性的魅力の人で、作風もあの力強い線と色調の強さは日本人に珍らしい男性的作家であった。

74歳の年齢は、作家にとっては正に円熟期に入ったばかり、まだ若い年齢である。彫刻のブールデルは80歳で亡くなる時に、「私に、もう80の年をくれたなら、もっと良い作品をつくれるのに。」と欲の深いことをいったそうだ。また富岡鉄斎も、本当に良い作品は80歳を超えてからの作である。田辺さんにも、もっと生きていてほしかった。生命の短かさを痛感し、日本の画壇と北海道のためにも惜しまれてならない。特に北海道の風景を、これ程に強く表現できる作家は今後出ないのではないかと思われる程である。

教員時代に大きな新聞紙で鼻をかんでいた姿や、前掛姿で水彩を描いて熱っぽく話しをする顔、最後まで函館弁で話していた太い声音など、今も目に浮んでくる。本当に惜しい人を失った。きっと極楽浄土でも絵を描き続けていることであろう。

心から冥福をお祈りする。